

逆境経験へのレジリエンスを規定する要因の発達学的検討 (中間報告)

福井大学子どもこころの発達研究センター 藤澤隆史
大阪大学大学院連合小児発達学研究所福井校 小島雅彦

Developmental investigations on definitive factors of resilience for adversity

Research Center for Child Mental Development, University of Fukui, FUJISAWA, Takashi
United Graduate School of Child Development, University of Fukui, KOJIMA, Masahiko

要約

本研究では、幼少期の逆境経験が、その後の発達にどのような影響を及ぼし、また、及ぼすとすれば一般的に悪影響なのか、ポジティブな影響をもたらす場合があるのかについて検討し、また、逆境経験からのレジリエンスやストレス後成長の個人差を規定する生物的要因と環境要因について検討を行う。幼少期児童、思春期児童、成人の3群に対して、逆境経験とレジリエンスに関する質問紙を用いたスクリーニングを行い、その後、ストレス脆弱性や外向的性格に関連するホルモンや脳機能の測定を実施する。思春期児童を対象に、質問紙によるスクリーニングを行った結果、思春期におけるレジリエンスは現在の抑うつやPTGと関連している一方で、PTSD症状は、それらとは比較的独立して生じていることが明らかにされた。

【キー・ワード】 外傷後ストレス障害、レジリエンス、外傷後成長

Abstract

In this study, we investigate the effect of early adversity on the development. We also consider how they affect the adversity for development. Moreover, we investigate the biological mechanisms underlying individual differences of resilience or posttraumatic growth. To this end, first, we executed screening test using questionnaire battery, and second, we measure their hormone and brain activation using ELIZA or brain imaging technique. As a result, we found that their resilience had positive relevance with current depressiveness and posttraumatic growth, while no relevance with PTSD symptoms.

【Key words】 Posttraumatic stress disorder, Resilience, Posttraumatic growth

はじめに

「若い時の苦勞は買ってでもせよ」という諺があるが、これは少なくとも、どんな場合にでもあてはまるわけではない。災害や戦争によって、死の恐怖に現実的に直面したり、暴力や他者の死を目撃した人は、不安や過剰反応などが後遺症となり虚弱状態となる、外傷後ストレス障害（PTSD）を引き起こすことがある。また、そのような大きな出来事でなくとも、事故への遭遇などにより、PTSD 様の心的問題は容易に引き起こされうる。しかしながら、もし、このような逆境が、諺のように人にポジティブな心的特性をもたらすのであれば、それは、「いつ、誰に、どの程度」ということが、実際的な問題となることは容易に想像できる。実際に、災害のような逆境への直面により、PTSD を発症する率は 15%程度であることが知られている。これは、逆境というストレスからのレジリエンス（回復力）にも、個人差があることを示唆しており、さらに、このような逆境が精神的成長（ストレス後成長：PTG）をもたらす可能性も含んでいることから、このようなレジリエンスや精神的成長の個人差が何によってもたらされているかについて、組織的に検討する必要がある。

本研究では、以上のような問題意識から、幼少期の逆境経験が、

- 1) その後の発達にどのような影響を及ぼすのか
- 2) 及ぼすとすれば一般的に悪影響なのか、ポジティブな影響をもたらす場合があるのか
- 3) 逆境経験からのレジリエンスの個人差の規定する生物的要因と環境要因
- 4) 逆境経験からのストレス後成長の個人差の規定する生物的要因と環境要因

について、検討を行う。生物的要因については、具体的には、ストレス脆弱性や外向的性格に関連する遺伝子多型やホルモンの測定を行う。また環境的要因については、社会経済状況（SES）、社会関係（両親、学校）、自尊心、性格などがレジリエンスに関与するとされていることから、質問紙法を用いてそれらの測定を行う。また生物的要因と環境的要因の相互作用がレジリエンス及びストレス後成長に及ぼす影響についても検討を行う。

方 法

本研究では、過去の逆境経験が現在のメンタルヘルスおよび精神的成長に及ぼす影響を検討するために、幼少期、思春期、成人期の 3 群を対象として、測定を実施することを予定している。現在までに、思春期群の対象とした調査研究によるスクリーニングを終えた。

調査協力者 F 県内の公立高校の 1 年生 158 名（男子 86 名、女子 72 名）

調査内容 **メンタルヘルス** Birlleson (1987) らが子どもの抑うつ状態のスクリーニングのために作成した 18 項目からなる自己記入式評価尺度である。村田 (1996) が邦訳し、最近 1 週間の状態について子ども自身が 3 段階評価を行う。回答に応じて 0 点、1 点、2 点と点数化し、full score は 36 点でカットオフ値は 16 点に設定されている。

外傷性ストレス様症状 IES-R (Impact of Event Scale-Revised) 改訂出来事インパクト尺度日本語版は、旧 IES (Horowitz et al, 1979) の改訂版として、米国の Weiss らが開発した心的外傷性ストレス症状を測定するための自記式質問紙である (Asukai et al., 2002; Weiss, 2004)。旧 IES は侵入症状 7 項目、回避症状 8 項目の計 15 項目より構成されているが、IES-R は過覚醒症状項目を追加し計 22 項目より構成されている。IES-R 日本語版は集団災害から個別被害まで、幅広い種類の心的外傷体験曝露者の症状測定が可能であり、横断調査、症状経過観察、スクリーニング目的などに、すでに広く使用されている。採点法としては、各選択肢の得点 0-4 点を合計し、尺度全体ないし下位尺度ごとの得点とする。

レジリエンス Block & Kremen (1996) が作成したエゴ・レジリエンス尺度 (ER89) の日本語版であり、先行研究において、その信頼性、妥当性が検討されている (畑・小野寺, 2013)。エゴ・レジリエンスは「自我弾力性」とも訳され、状況からの要求に合わせて自らの行動を調整する能力と定義されている (Block & Block, 1980)。信頼性では、大学生 520 名に質問紙調査が実施され、主成分分析の結果、原版と同じ 14 項目 1 成分解が得られ、十分に高い内的整合性 ($\alpha=.82$) が確認されている (畑・小野寺, 2013)。また妥当性では、大学生 261 名 (サンプル 1) と大学生 240 名 (サンプル 2) に質問紙調査を実施し、他の概念 (レジリエンス, 精神的健康度) との関連から本尺度の併存的妥当性及び構成概念妥当性が確認されている。

外傷後成長 外傷後成長は Posttraumatic Growth の訳で、宅 (2010) は、「外傷的な体験、すなわち非常に困難な人生上の危機 (災害や事故, 病を患うこと, 大切な人や家族の死など, 人生を揺るがすようなさまざまなつらい出来事), 及びそれに引き続く苦しみの中から, 心理的な成長が体験されることを意味している。外傷となるようなつらい出来事を経験した人々が認知している心理的な成長を測定するものとして, 本研究では, 宅 (2010) が開発した外傷後成長尺度 (PTG Inventory) の日本語版を使用した。

結果

各尺度間の相関 各尺度間の関連性を検討するために、各尺度について平均と標準偏差をもとめ、各尺度間の相関係数を算出した。結果を表 1 に示す。各尺度の関連性について検討すると、まず抑うつ傾向とレジリエンス、及び PTG の間に有意な負の関連性がみとめられた。同様に、レジリエンスと PTG の間には有意な性の関連性がみとめられた。PTSD 様症状は、いずれの尺度とも有意な関連性がみとめられなかった。これは、思春期におけるレジリエンスが現在の抑うつや PTG と関連している一方で、PTSD 様症状は、それらとは比較的独立して生じていることを示唆している。

表 1 抑うつ, PTSD 様症状, レジリエンス, PTG の各尺度の平均値と標準偏差及び尺度間相関

	M	SD	PTSD様症状	レジリエンス	PTG
抑うつ	10.68	5.40	-0.02	-0.56 **	-0.40 **
PTSD様症状	21.36	16.46		-0.06	-0.04
レジリエンス	21.59	7.19			0.55 **
PTG	48.19	21.33			

各尺度のストレス強度及び性差との関連 思春期児童が経験したストレス強度と性別が、各尺度に及ぼす影響について検討するために、ストレス強度（2水準）と性別（2水準）による2要因分散分析を行った。

その結果、まず、抑うつ傾向では、ストレスの主効果が有意であり、過去に受けたストレスが高かった群は、低かった群に比べて、抑うつ症状が強いことが明らかとなった ($F(1,154)=4.33, p<.05$)。一方で、その他の尺度については、ストレス強度及び性別の主効果は見られず、また交互作用についても有意なものは見られなかった。

表 2 ストレス強度、性ごとの抑うつ、PTSD 様症状、レジリエンス、PTG の各尺度の平均値と標準偏差

	ストレス低		ストレス高		ストレスの 主効果	性別の 主効果	交互作用
	男子	女子	男子	女子			
抑うつ	9.58 (4.32)	8.88 (3.66)	10.58 (5.69)	11.91 (5.76)	4.33* 低<高	0.10	1.10
PTSD様症状	21.52 (15.93)	21.88 (14.46)	16.82 (12.83)	25.20 (19.03)	0.05	2.19	1.85
レジリエンス	21.45 (7.57)	21.88 (5.36)	21.69 (7.82)	21.48 (6.77)	0.00	0.01	0.06
PTG	44.26 (20.42)	44.00 (18.60)	48.69 (21.97)	51.07 (21.39)	2.21	0.08	0.12

今後の予定

今後は、第一には、思春期群を対象とした生物的要因の測定を実施する、生物的要因の測定対象としては、ストレスへの脆弱性および性格の外向性の個人差を測定するために、唾液中のホルモンの測定と脳機能測定を実施し、レジリエンスに関与する脳機能部位を特定する。

第二には、幼少期と成人期を対象として、同様の要領にて第一段階のスクリーニングと生物的要因の測定を実施する予定である。

引用文献

- Asukai, N., Kato, H., Kawamura, N., Kim, Y., Yamamoto, K., Kishimoto, J., Miyake, Y., Nishizono-Maher, A.: Reliability and validity of the Japanese-language version of the Impact of Event Scale-Revised (IES-R-J): Four studies on different traumatic events. *The Journal of Nervous and Mental Disease* 190:175-182, 2002.
- Birleson P, Hudson I, et al (. 1987) Clinical evaluation of a selfrating scale for depressive disorder in children (depression self-rating scale) . *J Child Psychol, Psychiatry*, 28 : 43-60.
- Block, J., Block, J.H. (1980). The role of ego-control and ego-resiliency in the origination of behavior. In: Collings, W.A., editor. *The Minnesota Symposia on Child Psychology*, vol. 13, Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp. 39-101.
- 畑 潮, 小野寺 敦子 Ego-Resiliency 尺度 (ER89) 日本語版作成と信頼性・妥当性の検討パーソナリティ研究 Vol. 22 (2013) No. 1 p. 37-47
- 村田豊久, 清水亜紀, 他 (1996) 学校における子どものうつ病-Birleson の小児期うつ病スケールからの検討. *最新精神医学*, 1 (2) : 131-138.
- 宅香菜子『外傷後成長に関する研究』, 風間書房, 2010.
- Weiss, D.S.: *The Impact of Event Scale-Revised*. In: Wilson, J.P., Keane T.M. eds., *Assessing psychological trauma and PTSD (Second Edition)* . The Guilford Press, New York, 2004, pp168-189.

